

持続的な観光地づくりへ

JTB交流文化賞 受賞地域のいま 前編

—第1回(2005年度)最優秀賞—

兵庫県豊岡市企画部コウノトリ共生課
コウノトリも暮らすまちへ
豊岡の挑戦

豊岡市で1955年から官民一体となったコウノトリ保護運動が始まる。71年に国内の野生のコウノトリが絶滅。1989年、ロシアから受贈したコウノトリによる人工飼育で待望のヒナが誕生し、以後、毎年ヒナが誕生する。100羽を超え、野生復帰に向けて2005年に初の放鳥が行われた。

2002年、市はコウノトリをシンボルとしたまちづくりを推進するため、コウノトリ共生推進課(現コウノトリ共生課)を設置。

コウノトリも住める自然再生とセットで農村の美しい景観づくりを推進し、電柱の地中化、農道への植花運動も展開していった。

選考では「コウノトリを単に復活させただけでなく、農業、食、地域のあり方など、地域全体を蘇らせた示唆に富んだ取り組みである。地域住民が一体となり自然環境を守っていく、未来志向型の交流文化の取り組み」と高く評価された。

地域(観光地)の組織・団体対象の「JTB交流文化賞」は、持続可能な観光に取り組み地域を応援する賞だ。過去8回までの受賞地域はほとんど取り組みを進めているのか、2回にわたってリポートする。前編は、第1回最優秀賞の兵庫県豊岡市企画部コウノトリ共生課と第7回最優秀賞のNPO法人体験村・たのはたネットワーク(岩手県下閉伊郡田野畑村)の取り組みに焦点を当てた。

—第7回(2011年度)最優秀賞—

体験村・たのはたネットワーク
漁村の暮らし体験が地域を再生する
「番屋エコツーリズム」

岩手県田野畑村には、美しいリアス式海岸とそこで営まれる素朴な漁村の暮らしがある。昔ながらの漁師番屋が立ち並ぶ地元で当たり前の光景は、観光客を誘引し続けてきた三陸海岸の景勝地・北山崎に勝るとも劣らない第1級の観光資源だった。

体験村・たのはたネットワークは、「番屋」を田野畑村の自然と調和した暮らしの象徴として、生活体験プログラム「番屋エコツーリズム」を展開。漁船や漁業作業、

魚捌き、農林業、漁師風工芸などを体験プログラム化した。

それらは東日本大震災で一変したが、多大な被害を受けた中で「被災地見学、防災教育という新たな体験の視点を加え、果敢に地域の人々の手による着地型観光をいち早く復活した」と称賛された。これがJTB交流文化賞の受賞につながり同時に地域復興へのエールにもなっている。



「コウノトリの郷公園」で飼育されているコウノトリ



ガイドとともに自然観察

観光が地元の連携強化

豊岡市内では、飼育されたコウノトリを「コウノトリの郷公園」で観察できるほか、田んぼで羽を伸ばすコウノトリも目にすることがある。コウノトリの郷公園の来場者は昨年30万人を数えた。

野外で暮らすコウノトリは83羽(8月21日現在)で、その行動範囲は広く、これまでに北は青森県から南は鹿児島県まで37府県で飛来が確認されている。JTB交流文化賞を受賞した05

年は、初めての放鳥が話題となった年でもあり、これを機にコウノトリを目的地に豊岡市を訪れる人が増加した。市ではその当時、コウノトリを地域づくりに生かすことにより、「豊岡市環境経済戦略」とともに、

を策定し、コウノトリを観光に結びつける方向性を示していた。受賞の翌年からJTBと一体となったプログラム作りが始まる。この取り組みを通して、豊岡市がいわば「コウノトリツーリズム」を推進するうえで大きな土台が築かれていった。

最初に出発したJTBの旅行商品は、閑散期である4月10日にコウノトリを見て、城崎温泉に入ってもらった団体ツアー。コウノトリの生息地であるコウノトリの郷公園に、餌となる数多くの生き物が棲む湿地に整備する。最初の頃は、お金を払い、わざわざ泥だらけになって汗をかきに来る人はいないのでは、と思ったが、さすがJTBは参加者を見つけてきた(宮垣氏)。人数はそれほど多くはなかったが、ボランティア目的の来訪者があるという事実が環境保全活動に携わる人たちの大きな自信になった。今では、

「いち早い復活」の一文にも見てとれる。それらは、交流文化を通して震災復興を支援しようとするJTBの企画(きこ)と地元発の取り組みで継続的に行われる事業への支援という意味で合致していた。また、地元にとって交流文化賞の受賞には、直接効果と間接効果がある。

直接効果は、「観光業界で注目されている賞であり、多くの旅行会社の人たちが視察に来てくれた。大学のフィールドワークなど新たな多層を送りこんでくれる会社も出た(体験村たのはたネットワークコーディネーター・武井俊樹氏)」。認知度のアップや経済効果を含めた地域活性化があげられる。また、JTBネットワークでのさまざまな活用、今



豊岡市企画部「コウノトリ共生課」主査 宮垣氏

交流文化賞受賞の声

視察しに来た人から「コウノトリがいるからいいね」とよく言われる。豊岡は地域にある宝がたまたまコウノトリだった。どう

"宝探し。あきらめない"

この地域にも歴史や昔からの生活、文化な地域独自の宝があるはず。豊岡は初の放鳥が話題になった05年以前の30年間はほとんど知られていない。地域の宝を見つけて出よう。それをあきらめないでずっと続けていけるかどうかが一番大切なことだと思。



戸島湿地での環境保全作業

NPO団体がツアーの募集ができるまでに戸島湿地でのボランティア数は増えている。こうしたJTBとの一連の旅行商品作りの取り組みは、地元の旅館組合、観光協会、JAといった市内の各団体が連携するきっかけにもなった。

高垣氏は「自然環境を守るために地域貢献につながる作業は、ずっと続けている。だが、毎年同じことをしている地域全体の士気が下がっている。常に新しいアイデアを付加して足がかりをいきたい。我々だけではできないところもある。今後JTBの協力を期待している」と語る。

受賞を震災復興の力に

田野畑村は、岩手県の沿岸北部、三陸復興国立公園内に立地して海の自然が大きな観光資源。特に北山崎は、1989年に公益財団法人日本交通公社による全国の観光資源評価で、海岸では唯一の特A級評価を受けた景勝地だ。

だが、景観だけでは「写真撮ったら通過してしまふ」との認識もあった。そして観光を核に据えた地域活性化策が模索され始め

た。村の日常性に埋没していた三陸復興国立公園などのアドバンスを受けながら、漁村の暮らしを体験する体験観光プログラムへ入日本交通公社による全国の観光資源評価で、海岸では唯一の特A級評価を受けた景勝地だ。

おおよそ13年前からの取り組みだが、景観だけでは「写真撮ったら通過してしまふ」との認識もあった。そして観光を核に据えた地域活性化策が模索され始め



漁業体験の参加者を乗せて走るサッパ船

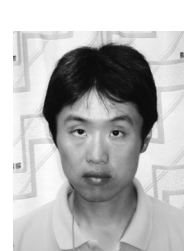


流失する前の机浜番屋群

型漁船・サッパ船は、ほとんど流失してしまった。田野畑では、物理的に計り知れない震災や津波のダメージを受けたが、体験型観光を支える地元民の思い入れまで奪われることはなかった。震災から1カ月ほど後の4月には、復興復興と観光による地域活性化が模索されていた。そうした一連の流れの中で特筆すべきは、JTB交流文化賞へのエントリーだ。この時点で入賞は未知数だったが、JTB交流文化賞への応募が観光を核にした地域一帯の動きに目標を与え、地元関係者を鼓舞したことは想像に難くない。そこでスピード感、交流文化賞の選定理由の一つになった

交流文化賞受賞の声

賞は、地域を見直すきっかけになる。また、地域には地の日常など、住民では気づいていない観光資源がある。JTBや財団交通



体験村・たのはたネットワークコーディネーター 武井氏

地域見直すきっかけ

公社の人々にも加わってもらい、地域の宝の掘り起こしと、地元の人々による磨き上げが大切だろう。さらに、受賞した地域を生かすために、受賞団体が集まった交流の場や相互視察の機会などがあれば、互いに切磋琢磨できるだろう。それらに一般の方が参加できれば、事業としても期待できる。

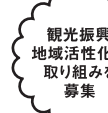
後への大きな期待感も生まれた。間接効果としては、地元発で継続的に行ってきた事業が、的を射ていたものであることの証明だ。それは、村全体の取り組みであることで継続的に行われる事業への支援という意味で合致していた。また、地元にとって交流文化賞の受賞には、直接効果と間接効果がある。直接効果は、「観光業界で注目されている賞であり、多くの旅行会社の人たちが視察に来てくれた。大学のフィールドワークなど新たな多層を送りこんでくれる会社も出た(体験村たのはたネットワークコーディネーター・武井俊樹氏)」。認知度のアップや経済効果を含めた地域活性化があげられる。また、JTBネットワークでのさまざまな活用、今

第9回 JTB交流文化賞 募集中!

締め切り
2013年
9/24火

JTB交流文化賞は、地域に根ざした持続的な交流の創造と地域の活性化に寄与することを目的として、2005年に創設され、毎年開催しています。自分の暮らし「まち」の魅力や取り組みを伝える「交流文化賞」と、旅先で心に残る体験記を紹介する「交流文化体験賞」を通じて、地域・文化そして人との新しい出会いを応援しています。

第9回 JTB交流文化賞選考委員



交流文化賞(組織・団体対象)

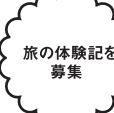
JTBは、地域の観光交流・地域活性化の取り組みを支援・推進いたします。

●「わが「まち」に誇りを持つために」

地域活性化の活動は、従来から地域に生き残っている自然や文化、歴史などの価値を掘り起こすだけでなく、地域が持つ豊富な知恵や特性を存分に活かしたアイデアを盛り込むことが重要です。等身大のまちの姿をありのままに伝えながら、まち全体でもてなす工夫を見つけた時、旅行者に新鮮な感動を与えられ、地域の皆様はわが「まち」に誇りを感じられることでしょう。そんな地域の取り組みを教えてください。

募集内容

名称	交流文化賞
対象	組織・団体
テーマ	国内外問わず、地域として、地域固有の魅力の創出・需要の創造、地域活性化、双方向の文化交流など、オリジナリティを活かした「持続可能な観光」の取り組み事例を募集します。 ※前編応募いただいた取り組み事例も応募いただけます。
応募形式	指定の応募用紙
新優秀賞	1作 賞金100万円
優秀賞	2作 賞金50万円



交流文化体験賞

目で見ただけでは物足りない。五感で感じて触れあった旅の体験は、心に深く刻まれて人生での大きな糧となるでしょう。著名な観光地を訪れるだけではなく、自分が見つけて、知って、交流するという能動的な旅のスタイル。交流文化体験賞では、旅を楽しむあなたの、人と人とのつながりや思い出から生まれたエピソードを募集しています。

一般部門 (社会人・学生) ジュニア部門 (小学生・中学生・高校生)

募集内容、応募要項など詳しくはホームページをご覧ください。

郵送またはインターネット*でご応募いただけます。詳しくはホームページをご覧ください。

JTB交流文化賞

検索

お問い合わせ先

JTB交流文化賞事務局

(株式会社JTB総合研究所内)
TEL.03(3525)4559
(10:00~17:30 土・日・祝日休み)
FAX.03(3525)4565
e-mail: jtb-kbunkasho@tourism.jp